



★43★

渡辺 大直

明けましておめでと〜ございませう。

正月に子や孫が帰ってきて、わが家の平均年齢がグッと下がる、それだけで家の中が明るくなった。わが家だけでなく牧場公園でも若者や子供たちの声はにぎやかで、明るい雰囲気にする。年を取ったからだろうか。『若さ』には、周りを明るくする一種オーラのようなものがあるのではないかと思う。

子牛市場に行っても似た感じを抱く。牛を連れてきている農家全体からすれば、若者が多いわけではない。しかし若い後継者たちは元気で躍動的で目立つ。市場に活気を感ずるのは、相場が良いばかりでなく彼らの存在が大きいと思う。

但馬牛農家の若き後継者たちは但馬牛に魅力を感じ、この地で牛飼いをやっていくと自ら決めた。だからそんな活気を発するのだろう。

世は少子高齢化社会。全国で有効求人倍率は1を超えず、都市、田舎、業種を問わず担い手不足は全国共通の課題のよう。先行きの不安を感じてしまふ。しかし後継者が育ってきている農家があり、牧場公園にも地域おこし協力隊員として、但馬牛繁殖農家を目指す3人の若者がいる。また正月早々、先輩が1人の若者を連れて来た。彼は淡路で就農し、但馬牛を飼う計画を持っており、牧場公園の『まきばの宿』に泊まって、一晩その夢を聞いた。

こつしたことからすると、今の若者には田舎だから、もうからないから、3Kだから

と、排除せず、魅力を感じる。新温泉町の取り組みは、地域おこし協力隊員として牧場公園の嘱託職員に採用し、公園の牛の世話をしながら牛飼いの基本技術を学ぶ。そして昨年、畜産試験場美方試験地跡地に造った研修センターの牛舎で、協力農家からリースしてもらった牛を飼い、実践



地域おこし協力隊員として但馬牛繁殖農家をを目指す3人と地元の若手畜産農家、県立農業大学校の生徒らによる交流会

的技術を身につけるとともに、生まれた雌子牛を育て、繁殖農家として自立する時の親牛にする。

さらに町、農協、農業改良普及センター、家畜保健衛生所、農業技術センターのチームが技術のチェック、経営に必要な知識や情報、美方郡の若手但馬牛農家との交流の場などを提供してサポートするというものだ。

こつした取り組みは先例がなく未完成で、まだ改善の余地はあるが、若者を地域に呼び込み、但馬牛を担う若者を育てる大きな一歩だ。そんなこともあって、県内外から注目されて視察が相次ぎ、ついでに博物館ものぞいてもらっている。

今年が平成最後の年であり、新しい元号が始まる。そんな未来に向けた節目となる年の初めに、但馬牛が地域を元氣し、新たな時代の『地域の宝』となることを願う。

# 若者に魅力伝え、応援

■筆者プロフィール■  
わたなべ・ひろなお  
1954年、新温泉町浜坂出身。県職員として畜産行政に長年携わってきた。県立但馬牧場公園「但馬牛博物館」館長。